4.3.5 ▶被災地域の消防本部等職員の手記

表4.3-19に示した岩手県、宮城県及び福島県で活動した被災地域の消防本部職員の手記を紹介する。全国消防長会の「東日本大震災活動記録誌」や各消防本部から刊行されている活動記録誌等に掲載されている手記から、活動状況が詳述されているものや今後の教訓となるものを掲載した。

表4.3-19 被災地域の消防本部等職員の掲載手記一覧

No.	活動県	タイトル	所属・氏名*1	出典
1	岩手県	「東北地方太平洋沖地震」 ～大津波～	陸前高田市消防本部 消防司令長　岩崎 克	全国消防長会　東日本大震災活動記録誌
2	岩手県	3.11　～　絆	釜石大槌地区行政事務組合消防本部 消防司令　佐藤正敏	釜石大槌東日本大震災活動記録誌編集委員会 「猛威への挑戦　東日本大震災－釜石大槌消防活動の記録」
3	岩手県	私の記憶（3・11）	釜石大槌地区行政事務組合消防本部 消防司令補　藤原明広	釜石大槌東日本大震災活動記録誌編集委員会 「猛威への挑戦　東日本大震災－釜石大槌消防活動の記録」
4	宮城県	仙台市消防ヘリコプター2号機出場！ ～東日本大震災初動対応の記録～	仙台市消防局 消防司令　大賀宏司	全国消防長会　東日本大震災活動記録誌
5	宮城県	仙台市消防職員指揮隊長等手記	仙台市消防局 警防部警防課主幹兼計画救助係長 渡辺智浩	仙台市消防局「東日本大震災における消防活動記録誌」
6	宮城県	仙台市消防職員指揮隊長等手記	仙台市消防局 若林消防署警防課主幹　菅野清和	仙台市消防局「東日本大震災における消防活動記録誌」
7	宮城県	被災から学び得たもの ～明日への希望として～	気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部 畠山 光	消防防災博物館 http://www.bousaihaku.com/bousai_img/tokusetu/genkou/shoboshokudannin_kesennuma.pdf（平成25年1月21日参照）
8	福島県	東日本大震災に於けるいわき市消防本部の通信指令センター	いわき市消防本部 消防司令　國井伸紀	全国消防長会　東日本大震災活動記録誌
9	福島県	東日本大震災が発生した日	相馬地方広域消防本部南相馬消防署 予防係主査 消防士長　川村周作	消防防災博物館 http://www.bousaihaku.com/bousai_img/tokusetu/genkou/shoboshokudannin_souma.pdf（平成25年1月21日参照）

*1 所属、役職、階級等は東日本大震災にて対応した当時のもの

「東北地方太平洋沖地震」
～大津波～

陸前高田市消防本部（岩手県）
消防司令長
岩﨑　亮

平成23年3月11日（金）14時46分、庁舎2階消防長室にて執務中であった。市議会3月定例会も15日の本会議を残すのみとなり、一息つきながら議会資料の整理を行っていたその時、本大災害の始まりである突然の揺れが襲った。インターネット防災科学技術研究所Hi-netの震源地は、恐れていた最も危険な海域に×印（震源地）が表示されていた。「来たか！」99パーセントの確率で発生するとされている宮城県沖地震の発生を直感し、「震源地宮城県沖」と大声を発した記憶がある。地震は机や書棚を移動転倒させる勢いで揺れ、その時間はとても長く3分とも5分ともそれ以上とも感じられた。階下の通信室では水門遠隔操作卓等あらゆる機器からアラーム音が鳴り響き机の脚は折れ曲がり書類等は散乱し足の踏み場もない状態であったが、当直職員は事前命令に従い防災行線無線で市内150ヶ所の水門閉鎖指示・避難勧告を広報し、「大津波警報」発表と同時に避難指示広報を実施した。遠隔操作水門閉鎖が全て完了した後、モニターに海岸線からかなりの引き潮が目視され、その状況を逐一防災無線で広報したが市民の一部には避難行動に移る様子はなかった。モニター監視の職員からの津波襲来の報告にその状況を見ると、津波が5.5mの防潮堤のはるか上部を超え、さらに気仙川左岸堤防を越流し市街地に勢いを増して流れ込む状況が映し出されていた。消防職員・団員は消防計画で震度4以上、津波注意報以上で招集される。以前から津波災害では庁舎浸水が想定されているので登庁した非番職員は順次事前訓練のとおり消防車両・資機材等

活動の場所：岩手県陸前高田市

の消防署機能移転活動を実施した。残念ながら高規格救急車退避中の職員がその途上で津波に巻き込まれ殉職することとなった。防災無線広報や他機関との連絡、周囲の状況監視などで9名の職員が庁舎に残留して避難すべき時期を失し、市役所連絡員と駆け込んできた民間人2名の計12名全員が庁舎2階屋上に避難となった。庁舎屋上では言葉で表現することが困難な光景が目の前に迫り、隊員らの安全確保が最優先と判断し、庁舎で一番高い無線鉄塔に登ることとなった。津波は全ての構造物を瓦礫と化し庁舎に衝突、鈍い衝突音と衝撃で庁舎が崩壊する危険を感じたが何もできず、第1波は10分弱で高田町市街地を瓦礫の海に変え

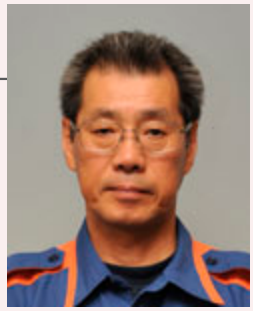
た。その後の引き波で瓦礫は太平洋に一気に流れ出し、瓦礫のなかから「おかあさん、助けて！」の叫び声に救助のプロもどうすることもできず腹立たしさに涙する隊員もいた。しかし12名全員がパニックに陥ることもなく冷静であることに感謝するものであった。幸い全員が夕刻には自衛隊ヘリにより救出され、集合場所となっている学校給食センターへ到着すると既に非番職員により消防署機能移転がほぼ完了し、駆け付けによる救助・救急要請に対応していたことは、繰り返し機能移転訓練を実施していた成果であった。市長以下市幹部職員は被災した市役所に取り残されていたことから、関係機関に災害状況報告・応援要請・食糧調達等の災害対策本部の役割まで引け受けることとなった。ほぼ全ての通信機能を失ったが唯一消防車両無線・携帯無線機が運用できたのは不幸中の幸いであり、隣接消防本部への孤立地域への出動要請、隣町への食糧支援要請に活用し、消防団に配備している消防団無線を孤立地域の状況把握・救助・救急・火災の通報に活用することができた。津波襲来後の救助案件は市内各地で発生しているが、消防署が対応できるのはその一部であった。津波は繰り返し押し寄せるため瓦礫のなかからの救助は時間との勝負となる。救助作業中には第2波・第3波と津波が押し寄せる鈍い音のなか、隊員は暗闇と恐怖の中で懸命に対応したが、救助資機材を活用した作業は不可能で、要救助者を瓦礫から引出し徒手搬送することが精一杯の活動であった。消防団も市民も親族や近隣の者が被災しているが必死に被災者を救出し、それぞれ可能な限りの対応を行ったものである。雪が降り寒さの厳しいなか隊員は懸命に活動し、23時ごろには1名の職員を除き全職員が無事であることが確認できた。明朝から行わなければならない救助捜索活動に緊急消防援助隊が投入されるとの情報を得たが市内被災状況を完全に把握できず、消防署も市役所も流失し活動範囲を示すべき地図もなく、かろうじて入手した市内地図1枚で学校給食センター車庫に調整本部を設置した。翌朝には自衛隊と調整して緊急消防援助隊との活動範囲を設定し、それぞれの地区で救助活動を実施したが、残念ながら生存者の発見はなく津波災害の恐ろしさを実感するものであった。また、市役所や県立高田病院など高層階の建物には100名単位の要救助者が取り残されている情報があり、陸

全壊の陸前高田市消防本部庁舎

上からの救出は困難であったためヘリコプターによる救出が実施されたが12日のうちに救出完了には至らなかった。夕刻からは順次緊急消防援助隊が到着しその活動範囲を広げることが可能となったが、道路被災・橋梁落下流失のため市内2地区に投入できず地元消防団と住民による救助活動となった。緊急消防援助隊の活動範囲を市内全域に望むものであったが、余震頻発で津波の襲来が予想される状況では海岸線の捜索は非常に危険で、万が一の場合避難する道路も確保されていないことから、その活動は一定のラインを設定しなければならなかった。また、順次投入される緊急消防援助隊の野営地確保が困難となり各県隊に不便をおかけしたと感じており、今後の受援計画では被害範囲を最悪最大で検討しなければならないものと痛感した。本災害で特徴的と思われる事案では、流失したハイブリッド車の電気系統からの火災があった。また、インターネットによる孤立情報の錯綜、消防団独自での物資調達などの事柄が次々に発生し、その処理に労力を奪われる事案も多く見られた。消防団の活動は、地震発生と同時に市内150ヶ所の水門閉鎖を10分ほどで完了し、沿岸住民の避難誘導中に大津波の襲来により34名の尊い命を失うこととなった。家族を、仲間を、住居を失いながらも活動を展開し、救助・瓦礫撤去・道路啓開・孤立地区へ徒歩での物資搬送・ご遺体の搬送・避難所警戒等の活動を展開し、4月30日まで不眠不休の活動を実施したことは、誠に頭の下がる思いであった。

本災害で全国の皆様からいただいた温かいご支援に感謝するとともに、1日も早い消防署・消防団の復興に職団員一丸となって前進する覚悟であります。「ありがとうございました。」

3.11　～　絆



釜石大槌地区行政事務組合消防本部（岩手県）
消防司令
佐藤　正敏

平成23年3月11日、その日私は甲部当直長として当務員12名で勤務していた。昼食を終え午後の眠気を感じる時間帯を過ぎ、それぞれの任務をこなしていた時であった。14時46分、携帯の緊急地震速報と同時に揺れが始まり、それは今まで経験のしたことがない強く長い揺れで、このまま日本は沈没してしまうのではないかと思うほどであった。

私は庁舎の崩壊を恐れ、表に飛び出し車庫内にあった車両を出すよう部下に命じた。その時一瞬、あの阪神淡路大震災でのテレビに映しだされた多くの倒壊家屋や挫屈したビル、あちこちで黒煙が立ち上がるあの衝撃的な街並みの映像が頭を横切り、釜石も同じ状態になっているのではないか？と一瞬不安と恐怖が襲ってきた。しかし、揺れが収まり次々入る119番通報では、家屋の倒壊による救助要請や火災発生等の通報が全く無い事に驚きながら119番対応しているうちに、その様な不安な気持ちが薄れていき、またその時は、間もなく襲ってくる大津波のことなども頭になかったのが正直であった。

釜石市では、今回の震災前から宮城県沖での地震発生確率が高まってきた数年前から津波ハザードマップを作成し防災会議等で対応策を協議していた。その時のシミュレーションでは、地震発生から25分から30分で、津波の第一波が到達されると予想していた。今回の津波はまさに予想と大差なく約34分で到達した。しかし津波到達予想時間が大差なくとも、津波の高さが想定を大きく超えるものであった。この想像を絶する大津波により我々消防はすべての機能を失われ、組織も崩壊、初動態勢がまったく機能しないものになってしまっていた。

今考えれば、この津波到達までの貴重な時間に消防としてどのような対応をとるべきか具体的な行動確認がなされていなかったのではないかと思う。ポンプ車を避難させる時、誰がどの時点でどの場所に移動させるか。ポンプ車での避難広報の時、津波が来た場合の退避場所、またその後どのように行動し連絡を取り合うのか。さらには消防としてその後に活動するために必要最低限の資機材等非常持ち出し装備の選定である。これらについて確立した計画がなされていなかったし、また私をはじめ津波に対する職員の意識も薄いものでしかなかったことが残念でならない。

結果、津波が大渡川から溢れ出したのを見て、あわてて車両を避難させようとしたが、すでに遅く津波に飲み込まれてしまった。私はあの時の状況を目にし、避難させようと車両に乗り込んだ職員の中に津波の犠牲になってしまった者がいると思わずにはいられなかった。しかし近くの避難場所に職員の姿が見られ全員の無事が確認できた時はほっとし、逆に庁舎に取り残された我々が水が引くまで何の行動も出来ない孤立状態になっていたことに焦りを感じた。

その晩は、庁舎近くでバスの屋根に取り残され救助を待っている要救助者がいるとの情報が入り救助に向かうことになったが、雪が降り気温が低

い暗闇の中、胸近くまである水の中での移動や、水没した多くの車、山のように堆積した瓦礫が支障となり、二次災害の危険が大きく途中断念することになった（後で確認したところそのような事実はなかった）。またその数時間後、ある程度水が引き移動が可能となったときに、住宅火災が津波の被災を免れた家屋に延焼拡大する恐れがあるとのことで、流されたポンプ車からホースを運び出し、瓦礫の中を延長して、津波から逃れた地元消防団と協力し朝方まで消火活動を実施し延焼を防いだ。

夜明けとともに消防本部機能を浸水区域外に移動するとのことで、被災した消防庁舎で朝を迎えた職員が、浸水し消防の機能を失った庁舎を棄て泥と瓦礫の中を歩いて移動するさまは、戦い敗れ去った戦士たちが城をすて逃げさるそのものに感じられ、あの時の光景と挫折感は今でも鮮明に頭に残っており、一生忘れることはないと思う。

その後、鈴子町の教育センターに移動した消防本部でも、消防の体制を整えることもできずに自衛隊、消防など全国から集まってくれた緊急援助隊の対応や、大槌町から延焼して来た山林火災の対応など、その場その場の活動に追われ統率の取れない状態が続いた。

私はこれまで消防学校で行われる各種教育訓練の受講機会を多く頂いて来た。特に消防大学校での救助科受講では、発災から72時間というゴールデンタイムの重要性を教示され、そのことについては重々承知していたが、今回発災から数日間、釜石の救助隊としてすぐに救助活動を行うことができず、一度も被災した地区に足を踏み入れることができなかった。その状態が続いた時は本当に悔しい思いでいた。

しかし、全国から駆けつけてくれた緊急援助隊の隊員の皆さんには、遠距離の出動であったにもかかわらず、疲れた様子も見せずに一生懸命活動していただいた。阪神淡路大震災のような地震による救助活動は、ある程度捜索範囲は決まっていたと思うが、今回のようにすべての建物が流され、広範囲におよぶ津波被災地での救助活動は、地元である私達でも経験はなく、何処をどのように捜索すればよいのか想像もつかない状況の中で、連日活動していただき心身共に疲れ果てる毎日であったことと思う。

また、私達職員の中には、発災からしばらく家族の安否が分からないまま活動し、時間を見つけて家族を捜すといった職員が多数いた。そんな職員を記遣っていただき、当市で長期にわたりご支援いただいた大阪市消防局の指揮支援隊長から「そのような職員の住居地区を重点的に（捜索）行きましょう」と言っていただいた。本当にありがたい言葉であった。

先に自衛隊や警察が何度も捜索に入った地区であったが、押し流された多くの家屋が瓦礫と化し堆積した場所から2体のご遺体を発見した。その中の1体が偶然にも我々職員の家族で、足場の悪い中、手あつく搬送し家族に引き渡していただいた。その場にいた私は、消防職員としての同じ使命を負う者同士の思いやりや気配りを強く感じ、胸を打たれる思いをした。また、たった2ヶ月間であったが、寝食を共にした全国で活躍されている消防大学校の同期の皆さんにも、発災後すぐに安否を気遣っていただき、更に所属する署を挙げて多くのご支援もいただいた。特にも大阪市消防局の皆さんには、派遣活動を終了した後も引き続きいろいろご支援をいただき、また東京消防庁の有志の皆さんには、傾聴ボランティアとして何度も釜石に足を運んでいただき私達職員の心のケアをしていただいた。

改めて多くの消防職員の「絆」を強く感じております。

今回の震災で我々消防本部では3名の職員を亡くし、多くの職員の家族や家を失ってしまった。ご冥福をお祈りするとともに、この方々やご支援していただいた多くの方々のためにも“今回の津波災害が想定外の災害であったことが大きな被害につながった”で終わらせることなく、しっかりとした検証をし、次につなげるような体制にならなければいけないと思う。そして今回改めてできた繋がりを大切にし、以前よりも強靭な消防本部となることが我々消防として真の復興を果たすことになると思う。

私の記憶（3・11）

釜石大槌地区行政事務組合消防本部（岩手県）
消防司令補
藤原　明広

平成23年3月11日、私は週休日でのんびり自宅のテレビで国会中継を見ていました。

突然地鳴りがして、地震が来ることを予感すると同時にテレビと携帯電話の緊急地震速報が鳴り、これまで経験したことのない激しい揺れに襲われました。家が壊れるような恐怖でおもわず近くにあったテレビを両手で抑えながら地震が収まるのを待ちました。尋常でない激しく長い揺れに、大規模災害と津波が来るかもしれない恐怖を感じながら、活動服に着替えて、釜石消防署鵜住居出張所に車を走らせました。途中なかなか繋がらなかった娘の携帯電話が運良く繋がり、「今、どこにいる。」と聞くと、「山田町の整骨院で足の治療を終え、お母さんと帰る途中だよ。」帰宅するには海岸沿いを通るため、「津波が来るからしばらくは高台に避難して動かないように」と話している途中、電話が切れてしまいました。

15時05分鵜住居出張所に出勤し、所内に入ると、水門閉鎖確認や避難広報を終え帰所したばかりの所員から「救急指令がありました。人工呼吸器を付けている70歳代の寝たきりの男性です。停電で呼吸器が数時間しかもたないので、県立釜石病院へ搬送するようにとの救急要請です。」大津波警報が出ている状況で出場をためらい、直ぐに通信指令室に「この状況で、救急出場は難しいと思われるが。」と電話を掛け直したが「至急出場せよ。」との命令でした。以前同様の症例の傷病者を搬送した経験のあった私が、隊長として隊を編成し出場しました。

現場は、所から1分で到着。器材を携行し傷病者と接触。部屋には、傷病者の他には傷病者の妻と介護施設の男性職員が付き添っていました。状況を考慮し、まず現場離脱を最優先に考え、器材の搬入等も考慮し無線で隊員1名増員を指示し、傷病者をストレッチャーで収容しているとき、「津波が来たぞ。」という声と同時に玄関から足元に一瞬にして津波が押し寄せて来ました。もう1人の救急救命士が直ちに、家族を2階に避難するように指示したときには、1階は津波に襲われ我々も介護士と一緒に階段をつたわり波に流されながら2階に上がりました。その時2階には隊員を含めて6人いたと思いますが、津波は容赦なく襲って窓ガラスは割れ、箪笥は倒れ、家ごと流されており身動きできないでいたとき、破壊された窓から外へ出た若い隊員が屋根と瓦礫を伝い、鉄骨造りの電気屋さんの屋上に上がっていました。全員で屋上に向かいましたが、屋上に避難できたのが4人で、屋根の上にいた家族は強い引き波に流され見えなくなってしまいました。傷病者も家族も助けることが出来ない自分たちの無力さが悔しくて残念でなりません。

強い余震が続くなか、屋上から見た鵜住居の町は、根浜海岸から鵜住居川と長内川を同時にすごい勢いで津波が襲い、両方の川の堤防を破壊させ、町を一気に飲み込み、よく耳にする地獄絵図とは、まさしくこのことだと怒りで身体が震えま

した。

その時初めて機関員の佐々木消防士がいないことに気が付きました。救急車内収容の準備をしていたため、玄関先にいた時までは覚えていましたが、彼がいないことで隊員全員がショックと悔しさで言葉も出ませんでした。

外は雪が舞い、だんだん暗くなってきましたが、まわりからは「助けて」とか「キャー」と言う悲鳴が聞こえ、屋根の上に上がっている人は、引き波でだんだん海の方に引き込まれ、何も出来ない辛さと悔しさで涙が止まりませんでした。

その時、1人の青年が家に挟まれ、腕と頭しか見えない状態で、「助けて、足が挟まれて動けない」という声を聞き、見てみると屋上からわずか10メートルくらいのところでもがいていました。

この人だけは何としても助けたい。しかし器材もなく津波が続いている状況で、「頑張れ！力を振り絞り屋根に上がれ！」と大きな声で繰り返すことしか出来ませんでした。青年の頭は、見えなくなったり、また見えたりを繰り返していましたが、第何波目かの津波が襲ってきたときに、挟まっていた足が外れて動けるようになったようです。自力で屋根に上がり瓦礫をつたい、私たちと合流できました。

また屋上北側から10メートル離れたところの屋根には、知人のタクシー運転手の前川さんが寒さで震えていました。外は雪で寒く暗くなって来ました。「前川さん、頑張って」と声をかけるしかできませんでした。みんなで、1時間おきに声をかけようと話しながら、屋上のプレハブ倉庫で一夜を過ごしました。プレハブの中は幸いにも毛布が2枚あり、全身が濡れた青年の服を脱がせ毛布でくるみ、あとの4人は足だけ毛布の中へ入れて寒さをしのぎました。

西側の山ぎわで、避難場所の鵜住神社では、避難した人たちが火を燃やしているのが見えましたが、暗いし水は引けないしどうすることも出来ませんでした。プレハブ倉庫の中では、「鵜住居出張所の仲間は、全員だめかな。釜石消防署、大槌消防署の仲間もだめかな。」とマイナスのことしか考えることが出来ませんでした。

午前3時に外に出て「前川さん頑張って、明るくなったら助けに行くから」という声をかけましたが、返る言葉は、だんだん小さくなってきて、低体温で意識が無くならないように祈っていました。夜が明けて外に出て、恐る恐る前川さんに目をやり、声を掛けると、「大丈夫だ。」と返事が返って来ました。「今助けに行くから。頑張って」と声をかけ、周りを見ると、消防団員の前川さんが一人で活動していました。彼に声をかけ、持っていた子綱のロープで、手すりにロープをかけてやっと下に降り、一旦鵜住神社へ行って、状況を確認しました。

その時、遠くから「おーい、明広さん」と自分を呼ぶ声がしたので、振り返って声の方を見てみると、鵜住居出張所の屋上から、だめだと思っていた仲間の声でした。「全員大丈夫か。」との問いに「大丈夫、水が引けないから活動は出来ない。」との声でした。変な話ですが、嬉しくて「よし頑張って、1人でも多く救助しよう」と残った救急隊員3人で声を掛け合いました。

鵜住神社に着くと署長と署員2名がおり、現状を報告して直ぐにタクシーの運転手の前川さんの所へ向かいました。水はまだ引かず、胸の辺りまでありましたが、身体も衰弱していると考え、消防団員の前川さんと隊員3名で現場へ向かいました。現場に着くと、薄着で裸足の状態でした。まず履物がないと周りが瓦礫だらけで足が危ないと思い、長靴を探していると、この津波で亡くなった救急救命士の鈴木健幸君の車が近くにありました。釣りが大好きだった彼の車のトランクに「これを使え」という感じで胴長靴がありました。それを履かせて何とか神社までたどり着くことができました。更には、全壊した家の窓から顔だけ出して助けを待っていた女性を救出しましたが、その時、「中に猫がいるの」と言われましたが、全壊の家の中に入ることも出来ず、「ごめんなさい」と言って彼女を背負って鵜住神社へ収容しました。

神社では、けが人もおり状態を観察し署長に報告し、あったかい缶コーヒーとおにぎりをもらい、山ぎわから三陸道に上がり、多数の老人がい

る五葉寮に向かいました。五葉寮に着くと、もう絶対だめだと思っていた、佐々木消防士が、非番で同僚救命士の小笠原司令補と入所していた老人たちを、消防団員と一緒に避難誘導をしていました。

100名以上の老人を岩崎団地から山ぎわをリヤカーとか徒手で神の沢まで運び、さらにトラックで栗林小学校と沢田地区の公民館に収容しました。

佐々木君が生きて元気に活動していたことで、私たちは疲れていることも忘れて活動していました。

その後は、5人で隊を組み鵜住居地区の活動をすることで署長に報告し、7分団第1部の屯所で待機しました。自宅が近所のため、下着やジャンパー等を5人分とりに戻って見ると、娘も妻もいませんでした。山田町で生きていることだけを願いながら、屯所に戻りあったかい食事をいただき、仮眠をとりました。

翌日は、寺前地区で鵜住居駅近くの美容店が500メートル以上流され2階で救助を待っていた5人の家族を救助し自衛隊のヘリコプターに収容し、三陸道では、恋の峠付近で負傷者のトリアージをして、救急隊に引き継ぐとの指示により活動を実施。トリアージタッグがない為、重症、中等症、軽症のポストを離れた場所に作り緊援隊の救急隊に搬送を引き継ぎました。

その時、三陸道から「お父さん」と娘の声が聞こえてきました。振り返ってみると妻と娘が歩いて向かってきました。思わず涙がこぼれ娘と抱き合いました。

三陸道では、家族を探しにきた人や歩いて自宅に帰る人、無事を確認し抱き合ってうれし泣きをしてくる友達、「家の母が見つからない」と泣きながら抱きついてくる友人等でいっぱいでした。その晩も消防団の屯所で仮眠していると、1時頃だったと思います。大槌の山火事が片岸の民家に迫っているとの無線で消防団と一緒に出動しました。古廟坂トンネル付近の民家に迫る勢いでした。その日は12時頃まで消火活動をし、隊を交代して、鳥ヶ沢トンネルを抜けて初めて釜石の町を見たときは、釜石駅から西側だったため全滅に近い鵜住居から見ると、建物も残っているし衝撃はあまりありませんでした。

その日からは、教育センターを拠点に捜索活動や山林火災の消火活動等を行いました。

3月17日16時過ぎの捜索活動を終わる時、同僚の救急救命士鈴木健幸君の家を見つけましたが、赤で×が書いてあり全壊に潰れていました。どこからか2階を検索できないかと思い、同僚隊員に梯子をかけて検索するように指示しました。「中に入るのは不可能、でも人がいる気配がある。」と報告がありました。救助工作車が被災し資機材のない私たちは、すぐに鵜住居地区で活動をしていた緊援隊の松山消防局の救助隊に連絡をとり、家族を含めて4人を発見し2階から救出していただきました。最後に健幸君の傷んだ遺体を目にしたとき、本当にこれが健幸君なのかと思われるくらい苦しそうな表情で私たちも涙が止まりませんでした。そして我々釜石消防署の隊員全員で担架搬送するような心遣いまでしていただき、本当にありがとうございました。

その後も捜索活動を継続し、初めて家に帰ったのが3月21日でした。家に帰っても眠ることができず、避難所になっていた栗林小学校や公民館に足を運び地域で炊き出しをしている手伝いをしていました。3月22日から小佐野出張所で救急隊として6月30日まで活動しました。救急活動では、大阪府の救急隊や、北上、花巻、遠野消防の救急隊の応援がありましたが、県立釜石病院が震災により入院病棟が8月下旬まで受け入れ困難だったため、盛岡市や北上市の二次、三次医療機関までの搬送が多く、往復5時間から6時間かかる救急搬送本当にありがとうございました。感謝・感謝でいっぱいです。

この震災から学んだこと、防災の拠点となる庁舎や車両、資機材は被災してはいけないということ。まだまだ釜石大槌は、復興には時間がかかると思いますが、応援してくれた全国の皆様に感謝し職員一丸となって頑張っていきます。本当にありがとうございました。

被災地域の消防本部等職員の手記（4）（宮城県　仙台市消防局）

仙台市消防ヘリコプター2号機出場！
～東日本大震災初動対応の記録～

仙台市消防局（宮城県）
消防司令
大賀　宏司

平成23年3月11日（金）、その日、午前中は仙台市消防ヘリコプター2号機（ベル412EP）を使用して航空救助訓練を実施、着陸後は訓練参加クルー全員でのディブリーフィングをいつもどおりに…。昼食をとり、ちょっと昼休み。午後からは消防局警防課との航空関係調整事務に携わり、その仕事も片付いた14時半すぎ、やっと自分の仕事が始められると思った矢先のことだった。

デスクに向かって仕事をしていた14時46分頃、突然ゴォーッという地鳴りとともに南北の大きな横揺れに見舞われた。「大きい。とにかく1分程度はじっとして揺れが収まるのを待とう。」と思ったが揺れは一向に収まらない。「長い。今までの地震とはぜんぜん違う。何かとんでもないことが起こっている。」と直感した。

3分ほどだっただろうか、揺れが収まったところで、庁舎・格納庫の安全点検を実施、そしてすぐに消防ヘリ出場準備を開始した。

ヘリコプターを格納庫から駐機場に搬出したころ、消防情報センターからホットラインでヘリコプターの出場指令が下命され、同時に大津波警報が発表されたとの情報を得た。

15時00分。仙台市消防ヘリコプター2号機が荒浜航空分署（仙台市消防局ヘリポート）を離陸。

活動の場所：宮城県仙台市

機長は私、副操縦士、整備士兼機内オペレーター、航空救助隊員は2名、計5名が搭乗しての出場。

離陸後、仙台新港の沖にある防波堤に機首を向け、釣り人等の存在について確認することとした。釣り人等はいないことが確認でき、仙台新港の南側防波堤から仙台市の南に隣接する名取市との境界に流れる名取川河口に向けて海岸線沿いを飛行。大津波警報発表に伴う機外拡声装置による避難広報の実施並びにヘリコプターテレビ伝送装置による情報収集を開始した。午前中の快晴が嘘

のように、仙台市内には雪雲が流れ込んできて、非常に視界の悪い気象条件下での活動であった。

仙台新港と名取川河口間を数回往復した後の15時28分頃から、消防ヘリポートの所在地でもある仙台市若林区の深沼海水浴場に設置されている波消しブロックが、海岸と地続きになるくらいの引き波を視認した。その時「間違いなく津波は来る。」と思ったが、それがどのくらいの大きさなのかまでは予想できなかった。

航空救助隊員は消防波を用い、地上で活動中の消防隊員や消防団員に対して、海岸線から直ちに避難するよう呼びかけた。

15時42分、七北田川河口の上空において海面上昇を確認した。

「津波だ。早い。」

津波は海岸線の砂浜を易々と越え、海岸線に防潮林として整備されている「浜辺の森」に到達し、みるみるうちに浜辺の森のなかを流れる「貞山堀」まで来た。流れは止まらない。

仙台市若林区の海岸部にある「荒浜地区は大丈夫か。」

荒浜地区上空に到着すると津波は荒浜の街を全て飲み込んでいた。住宅が、自動車が、津波に流されている。消防ヘリポートも津波に飲み込まれた。今は消防ヘリポートに着陸することはできる状態ではないし、仮に津波が引いて離着陸が可能になったとしても消防ヘリポートに備蓄している航空燃料は使用できないだろう。ヘリコプターに搭載されている残燃料を確認した。「大丈夫だ、まだ飛べる。」荒浜小学校屋上には避難している人が確認できた。

整備士と救助隊員から救助活動に移行するよう進言があった。堅牢な建物内に避難できている人はそこで夜を明かすことができるが、流されて漂流物などにつかまって助けを求めている人には、

宮城県仙台市　津波襲来

夜を明かす猶予はない。屋外で救助を待つ人を優先することとし、情報収集と要救助者の検索を継続した。

同時に陸上自衛隊霞目駐屯地司令に対して、要救助者の引き継ぎのために霞目飛行場を使用すること及び消防ヘリが活動を継続するための燃料給油支援の要請を、飛行場管制塔を通じて行った。

16時10分には荒浜交差点のガソリンスタンド屋根上に要救助者を確認、クイックストラップにて救助した。

16時20分、飛行継続するには燃料が心もとなくなったので霞目飛行場に着陸した。事前の調整どおり、要救助者の引き継ぎはスムーズだった。エンジン停止後、ヘリコプターに給油したものの、天候は悪化しすぐには離陸することができないくらいの降雪となり、地上においても視界はかなり低下していた。

この時点では、地震と津波による被害の全体像は全く把握できていなかったが、仙台市沿岸部の惨状を目の当たりにして、宮城県内のみならず東北地方太平洋沿岸部においても相当の被害がでているだろうことは容易に想像できた。

天候が一時的に回復した隙を狙って、霞目飛行場を離陸。活動継続に向かった。

被災地域の消防本部等職員の手記（5）（宮城県　仙台市消防局）

仙台市消防職員指揮隊長等手記

仙台市消防局（宮城県）
警防部警防課主幹兼計画救助係長
渡辺　智浩

地震発生当時の業務は警防部警防課において、特殊災害対応や広域応援の担当であり、この地震災害はこれまでの経験を駆使して担当の業務を発揮しなければならないとの気持ちで対応に望みました。

市内の状況把握は勿論ですが、県内の被害状況の把握、緊急消防援助隊の応援要請、授援活動等をはじめに手がけました。

県内の被害状況調査と応援の体制ですが、宮城県広域消防相互応援協定では、県内4ブロックに区分してある幹事消防本部に調査を行い、授援が必要な消防本部へ応援部隊を派遣する調整がありますが、市内の被害状況の把握すらできない状況では、県内の調整まで実施できる状態ではなく、計画に則り、今回被害が比較的少ない代表代行消防本部である、大崎地域広域行政組合消防本部に各ブロックの被害状況の調査と、ブロック内外の応援体制のとりまとめを依頼しました。

この計画に基づく担当者間の連絡調整の会議や緊急消防援助隊のブロック訓練、県内応援の訓練は毎年実施されており、更に今年度は5年に一度の緊急消防援助隊全国訓練が実施されたこともあり、担当者間の連絡調整は協定の想定を越えているものの、スムーズに機能したものと考えますし、代表消防本部である当局は市内の活動に専念できたものと考えます。

緊急消防援助隊の授援体制でありますが、今回の出動は消防庁長官指示というこの制度が始まって以来初めてのスタイルとなったことから、想定外の規模の部隊が応援に駆けつけることになりました。

本来であれば、必要な部隊を要請し必要な場所に配置することが本来の計画ですが、要請とは裏腹に次々に投入される部隊の配置に苦慮するという状況でした。

仙台市の授援計画で定めている野営場所がその規模を超えてしまいそうな部隊の投入があり、支援物資等の受け入れ場所と重複してしまうなど野営場所の確保に苦慮しました。ひと通りの授援の体制を整えた後、宮城県庁の消防応援活動調整本部に代表消防本部の一員として入りますが、こちらでもやはり要請の規模を超える部隊が県内に次々に投入され、特に被害が甚大であると報道された気仙沼市や南三陸町に投入せよとの事でありました。気仙沼市や南三陸町は平坦な場所が少ない上そのほとんどが津波の被害を受けており野営場所を確保することができず、隣接する被災の少ない消防本部（市町村）に野営場所の確保を依頼しましたが、次々に投入される部隊にその隣接する消防本部からも、燃料や食料の確保が難しくパンク状態であると苦情が入る状況でした。

今回の災害は、想定や対応策の計画をはるかに超える災害となりましたが、常日頃の備え、我が組織で言えば常日頃の他機関との連携訓練等、組織の技量を超えた場合に重要であることを再確認させられるものでありました。今後とも、様々な団体や機関と協定を結ぶなど事前に協力体制を確立し相互に補い合いながら市民の安全・安心の確保の充実を図っていく必要があると考えます。

仙台市消防職員指揮隊長等手記

仙台市消防局（宮城県）
若林消防署警防課主幹
菅野　清和

1　発災当時の活動概要について

3.11発災当日の署隊本部は、地震での被害対応と津波による救助要請に対応する部隊との二方面対応とする部隊運用が求められて困難を極めた。

幸い管内での地震被害の発生件数は少なかったが、沿岸部の津波被災地域からの救助通報が多数入電し、出場隊の進入を主要幹線の荒浜・原町線と井土・長町線の二方面に分けて試みたが、いずれも流出した松の木・車両及び倒壊した家屋の瓦礫等が堆積しており、部隊進入が出来ないとの報告を受け痛恨の極みであった。そのため、活動方針を変更して、仙台東インターから部隊進入を行い、仙台東部道路上に各隊を部署配置後、道路のり面沿いからの救助活動と車両による照明活動を主眼とし、要救助者への「希望の光」を持たせるように指示した。各部隊から東部道路のり面にいた十数人以上の避難住民等を救助したとの報告を受けた。

3.12早朝から仙台東部道路上に若林署前進指揮本部を開設して、本格的な部隊指揮を執ることとなった。仙台東部道路上には、自衛隊・県警隊員の姿は確認できず他機関に先駆けて部隊活動を容易に展開実施できた。

3.13～18早朝、東インター入口で指揮本部長として、緊急消防援助隊県隊長、陸上自衛隊の部隊長、南警察署担当者と消防作成ブロック図を基に捜索活動区域割等の打合せを18日まで継続して実施した。

2　消防活動の検証

⑴発災当日から数日は、多発する余震による津波退避命令があり、広範囲に展開活動中の消防職員には無線連絡で対応できたが、しかし、消防団員に対する避難指示の問題があった。そのため、消防職・団員が常に行動を共にして近隣の高所へ避難させることを指示した。

⑵警防本部等との電話連絡（内線・外線）等が不通状態となったことから、通信体制の確保が必要である。

⑶津波被災区域の広範囲の惨状、生存者救助方法、人海戦術による手作業では限界があり、発災当時から三日間は大型重機の投入等による生存者の救出が必要不可欠であることを痛感した。

3　受援体制について

緊急消防援助隊県隊長と捜索活動区域及び部隊運用が当日の早朝現地打合せとなり、部隊間の相互連絡体制が構築できなかったことから、捜索活動日の前日に署隊本部か野営地での打合せを行い指揮隊間の意思の統一が必要だった。

4　心に残ること

津波被災地域で捜索活動中に親族を探す方と会

話する機会があり、なぜ津波警報発表時に避難しなかったのかと尋ねたところ、今まで津波が来ても被害が無かったことで自宅にいた方や一旦避難したが、まだ大丈夫と思って帰宅して被害にあった方が多かったと話され、津波に対する「油断」が被害を拡大させた要因であることを痛感し、ふと、平成22年2月のチリ地震津波警報での沿岸部住民への避難広報活動を思い出した…

あれが警告の前触れだったのか…

5　最後に

震災発生から4箇月が過ぎましたが、瓦礫や住宅地内はきれいに片付けられ津波被害が無かったかのように感じられるが、荒浜小学校周辺を見るとあの日の現場指揮や捜索活動の困難な状況が思い出される。しかし、いまだに被災地内で発見されていない方もおり、最後の一名まで捜索・発見するという気持ちを持って現在警戒活動が続いています。

今回の大震災を教訓に、消防人としての「団結」と「絆」を改めて心に刻まれ、大規模災害になればこそ「不撓不屈」の精神で立ち向かう気持ちを常に忘れてはならない。

被災から学び得たもの
～明日への希望として～

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部（宮城県）
畠山　光

1. はじめに

私の住んでいる気仙沼市は、三陸海岸特有のリアス式海岸の湾奥に、波の静かな美しい良港を擁していました。海は漁業や養殖業など豊かな恵みを与えてくれました。

私の自宅があった二ノ浜地区も入り江に小さな集落を形成しており、自宅も庭に小舟をつけられるほど海の近くにありました。

3月11日、私は非番で自宅にいました。津波で地区は壊滅状態になり、海岸線に一本あるだけの道路も寸断され、避難所に指定されている浦島小学校は孤立しました。さらに、気仙沼湾一帯の火災により、一晩中黒煙に包まれました。

その中で私が被災して実際に体験したこと、感じたことを記していきます。

2. 地震と津波、自助と共助

14時46分、突然の強烈な縦揺れに、「この地震では家が倒壊する」という恐怖を感じました。驚いている母を屋外に押し出し、2人で庭に四つ這いになると、まもなく強い横揺れが始まり、隣の家は地面に沈み、自宅にもひびが入りました。「とうとう宮城県沖地震が来た」と思い、次にすべきことを考えながら、ひたすら地震がおさまるのを待ちました。揺れが小さくなったので、「津波がくるぞ!!　逃げろよ!!」と地区全域に届くように、何度も何度も叫びました。庭先の湾を見ると、すでに水がすごい勢いで引いていました。

私は、津波到達までに海岸道路を抜けられないと思い、消防署へ向かうのを諦め、避難行動に移りました。いろいろな荷物をまとめようとしましたが、「津波にみんなくれてやれ」と思い直し、必要最低限の物を持ち、車も諦め、800m先の避難所へ向かうことにしました。

家を出る頃、6mの大津波警報が発令されたと同報防災行政無線で知りました。庭を出ると、私の声で怖くなったと、近所の人が避難を始めていました。私は足の不自由なお年寄りを背負ったり、津波の情報を分からないお年寄りを家から出したり、高台中腹まで何往復かしました。健康な人には、手分けをして近所を確認するように頼みました。

自宅にあったリヤカーにお年寄りを乗せて、歩ける人に高台へ引っ張って行くように頼んだりもしました。「もっともっと高台へあがれ!!」と声を張り、とにかく高く、海岸から遠くへ避難させました。

自宅へ戻ろうとする車も、水門を閉めようと戻ってきた消防団員にも、「とにかく命が優先だ」と言い高台へ避難させ、最後に自転車で避難所へ向かいました。声がけができた家は十数件が限界でした。

途中、対岸の商港岸壁の海面が徐々に上がっていくのが見えました。津波が防潮堤を超えると、

一気に海水がなだれ込み、危険物のタンクが次々と倒れ、流されていきました。

「何とか生き延びた」と思う反面、鹿折地区で仕事中の妻、南郷地区の幼児園にいる次男・三男を、今津波が襲っていると思うと、不安で押しつぶされそうになりました。

学校に到着すると、下校前だった長男と、別々に避難した母がいてとりあえずほっとしました。

まずは自治会長に地区の避難者、未確認者をまとめてもらい、学校長などと避難所物品の確認をしました。強い余震が続いたので、建物の中は危険だと思い、校庭にテントを張って過ごすことにしました。電話は通じませんでしたが、メールができたので、家族の無事を確認することができました。消防本部には参集できない事と避難所の状況をメールしました。

3. 火災と黒煙と消火作業

夕方に雪が降り、2、3cm積もりました。

避難所には様々な業種の地区民がいて、それぞれ救護班などの役割ができあがっていきました。

17時40分頃、高齢者2人が高台に取り残されていたので、7人で救出に向かいました。

1人を担架に乗せたところ、目の前で爆発音とともに黒いきのこ雲が現れ、黒煙は急速に大きくなりました。私達は身の危険を感じ、もう1人を私が背負い、死ぬ気で避難所へ走りました。まもなく、木々に囲まれた避難所は轟音と火の粉にさらされることになりました。

火の勢いが増すと、急に強烈な風が起こりました。飛ばされそうになるテントをたたみ、燃えやすいものは安全な場所に離し、子供達には防炎の非常用毛布をかぶせ、校庭の真ん中でじっとさせました。厚い煙と熱気で2m先が見えず、呼吸も思うようにできず、「これは、死んだな」と絶望しました。

消防本部に状況を伝えましたが、孤立した避難所は、熾烈な火災になすすべもなく、運に任せるしかありませんでした。

それでも、プールがあったので、軽トラックに水槽を積んで、移動水槽車にして、なんとか水バケツで消火を続けました。

炎上する気仙沼湾

夜にはメールもできなくなりました。携帯電話のテレビで、気仙沼湾一帯が火の海になっている映像が流れ、「津波で助かったのに今度は火災か」と何ともいえない怒りを感じました。幸い浦島小学校付近の火災は21時になると落ち着いてきました。皆で火災の前に積もった雪が、飛び火を防いでくれたのではないかと話しました。

子供とお年寄りは、最近耐震補強したばかりの教室で寝ることにしました。避難者数に対して毛布が少なかったので、毛布の包装ビニールやカーテンなどを利用して寒さを凌ぎました。子供達が震えていて、季節外れの寒さを恨みました。

気仙沼湾を見ると、燃えたがれきが津波で行き来していて、まるで地獄絵図を見ているようでした。

対岸では一晩中サイレンが鳴り響き、何もできない自分を悔しく思いました。

4. 山越え

12日、日の出前に対策班のミーティングを行いました。夜明けとともに偵察機が飛ぶと考え、校庭に「200人・水食料なし・毛布不足」と情報を書きました。沢水で備蓄米を炊き、食事をとることもできました。

そんな中、生存者2名が漁港で発見されました。津波にのまれたものの、小船に這い上がり、一晩

押し寄せる津波で炎上し拡大してゆく火災

中燃えさかる湾内をさまよっていたようで、体は冷たく、ケガも深く、ほかの地区の状況も厳しい事が容易に分かりました。

集落を見渡せる高台にも行きましたが、自宅があった場所は、すべてが津波にさらわれて、がれきすらありませんでした。

9時頃には大津波警報が解除になり、火災も落ち着いたので、徒歩で山越えをし、消防署へ向かうことに決めました。

沿岸部は津波と火災で壊滅状態でした。道路はがれきで埋め尽くされていました。それでも、対岸の避難ビルに取り残された人がヘリで救助されていて、救助の手が差し伸べられているのを希望に感じ、何度も何度も山を越えました。口の渇きは沢水をわずかに含んで凌ぎました。

生存者がいれば、被災状況や避難者数など情報収集をしながら、ひたすら歩きました。食事をとれていない人におにぎりをあげたり、水などを恵んでもらったり、5時間かけて山を越えました。

しかし、鹿折地区も津波と火災で変わり果てていました。

鹿折大橋に出ると、自衛隊や緊急消防援助隊の車列があり、「このような応援があれば何とかなる」と、被災者として非常に頼もしく感じたのを覚えています。

消防隊と合流して、参集途上で知り得た情報を災害対策本部へ伝えました。

24時間後に参集を果たした私は、そのまま現場活動を志願しました。ここから、私の消防士としての震災との戦いが始まりました。

5. 被災して感じたことと今後の課題

今回の経験で感じたことは、津波に対しての自助の重要性と共助の難しさ。そして、公助の限界でした。

まず、津波に対しては、避難行動を早く起こせるかが最も重要でした。

そして、今回は最大波の到達まで時間があったために行えた事も多く、私達の地区はコミュニティーによる避難行動で、より多くの方が助かりました。しかし、私は津波に巻き込まれるのではないかという恐怖を常に感じながら活動しました。このように、津波に関しての共助は、共倒れになる危険性もあるため、自力避難困難者のサポートなど課題も多いと思います。

津波浸水域の多くの避難所は、津波の直後から孤立しました。アクセスやネットワークも途絶し、公助の手が届けられず、数日間何とか凌いで生活していた避難所もありました。

今後も、津波災害が起きた場合に被害を最小限にすべく、防災施設・道路・通信などハード面の整備・強化は必要だと思います。しかし、津波による死者をなくすためには、防災計画・防災教育・自主防災組織などのソフト面の検証・強化が必須だと思います。

今回の震災から得た教訓を必ず生かすため、ゼロベースからの見直しも含め、私たちの責務はより重要になっています。

原折地区
宮城県
参集経路
南部地区
避難所（活動場所）
消防本部（防災センター）
気仙沼消防署
気仙沼商港
自宅
浸水区域
火災区域

東日本大震災に於けるいわき市消防本部の通信指令センター

いわき市消防本部（福島県）
消防司令
國井　伸記

いわき市消防本部指令課は隔日勤務1班6名・2班編成と日勤者2名、計14名体制で34万市民の安全･安心確保のため指令業務にあたっています。

平成23年3月11日（金）14時46分　自宅にいた私は、ゆっくりとした横揺れを感じた。今までにない長い揺れに、窓から外を見ると電線の揺れがだんだんと大きくなり、自宅の引き込み電線のガイドが切れて電柱が倒れるような恐怖を覚えると同時に、市の南西部に位置する小名浜石油コンビナートが頭に思い浮かび、大きなダメージを受けているのではと不安がよぎった。

揺れが収まり、家族の安全を確認して妻に後を託し、自転車で5km離れた職場に向かった。

途中、道路の陥没や隆起、亀裂、コンビニ店の販売物が散乱しているのが確認できた。真っ先に消防本部3階の指令センターに飛び込んだ。危惧した石油コンビナートに大きな被害は出ていなかった。

地震発生当時の指令センターは、3名が着台業務にあたっていた。携帯電話の緊急地震速報が緊急音を鳴り響かせ、その直後に激しい揺れに見舞われ、強い揺れが数分間続き、マウスの操作は不能となった。揺れが収まり、すぐにテレビ情報に基づく福島県大津波警戒を指令し、勤務者5名で初動対応にあたった。

活動の場所：福島県いわき市

地震の揺れが収まった直後から119番通報には、水道管破裂やブロック塀倒壊等のほか、目的外問い合わせ、医療機関の問い合わせなどが多く、延々と電話は鳴りどおしの状態が続き、15時過ぎ頃から救急・救助要請、火災通報の入電が多くなり、通常は数秒で照会できる発信地照会も10秒以上かかった。こののち電話回線の混信やシステムの不安定な状況が13日まで続いた。

通報のなかで、軽症救急と思われる事案等については、通報トリアージを実施し、非常事態であることを通報者に説明し納得してもらい自己対応、家族、隣保共助などをお願いした。

緊急事案は速やかに指令し、時間的余裕がある事案は、各署所に対応させる活動方針とした。夕方頃には、車両運用表示盤の84車両のうち、特殊車両数台を除く全てが避難広報、火災、救急、救助の活動を示すランプ表示となり、組織を挙げて全員で対応していることが確認できた。

119番通報は、発災日から5日目をピークに徐々に少なくなっていったが、市役所本庁舎が地震で損傷し、市災害対策本部が災害直後から消防本部内に設置され、電話取り次ぎ対応も重なり業務は困難を極めた。これらのことに対応するため初めの4日間は、全課員で対応した。その後、日中は8名、夜間は6名を基本とした勤務が3月いっぱい続いた。

津波被災現場の救助活動と消火活動に総力を挙げて傾注したが、余震が起きるたびに津波警報が発表され、警報解除の予想がつかず、無線で隊員相互の連絡を強化し、現場に活動判断を委ねた。

分署・分遣所の各1施設の通信施設が、津波浸水で損傷し、使用不能となった。被災した各隊は本署及び支所へ仮配置され、管轄地域の災害対応を確保した。無線中継局や基地局は、停電したもののバックアップ機能が正常に作動した。

3月14日11時頃、福島県沿岸で活動する防災ヘリから「福島第一原発きのこ雲確認」との無線を傍受。それまで、活発に活動していた各県支援防災ヘリの交信は、それを境に途絶えた。翌日、政府が半径30km以内の住民に対して、屋内退避を指示した。このことで、市外に退避する市民や双葉地区からの避難者が、いわき市の避難所に殺到し、救急通報が相次いだ。発生から1週間を過ぎた頃から、重症傷病者の市外転院搬送要請が相次いだ。ヘリコプター搬送では、県災害対策本部と病院相互間の調整等、事前手配に時間を要した。また、救急車による搬送は、長時間不在となるため、出動の少ない分遣所救急隊の配置替えをして市街地を強化。市外搬送は医療関係者1名を同乗させ、隊員2名で従事させた。

いわき市消防本部　指令センター

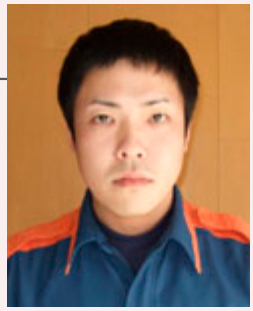
消防活動の根幹となる災害通報受付は、通信技術の進歩に伴い、画期的に進化し、今回の大地震でも当本部の緊急情報システムは、ほぼ正常に機能した。

この大災害の被災地において、指令業務にあたった者の1人として痛感したのは、迅速で正確な情報収集であった。

しかし、現場から伝えられる情報は、正しく的確なものではあったが、言葉、文字情報には限りがあり、さらに詳細な情報を要求する状況であった。後に、マスメディアから発表された映像情報は、その場の雰囲気、臨場感、細かい状況を一目でくみ取れた。いち早く災害映像情報を収集し、中枢部へ伝達できれば、非常事態における最適な判断情報に成り得るものと思う。

最後に、全国の消防組織からご支援を賜り消防活動が完遂できましたことを厚く御礼申し上げます。

東日本大震災が発生した日



相馬地方広域消防本部南相馬消防署（福島県）
予防係主査　消防士長
川村　周作

平成23年3月11日14時46分マグニチュード9.0の地震が発生した。発生時は当番勤務であり、庁舎1階の書庫で台帳整理をしていた。すると突然、自分の携帯電話が鳴った。マナーモードであるはずなのに、なぜ音が出るのか不思議だったが、それが今では聞き慣れた「緊急地震速報」のアラーム音だと理解したのと同時に、大きな揺れが自身を襲った。咄嗟に前庭に駆け出すと、当日の勤務者全員が揺れの大きさを探っている様子であった。

地震対策計画に基づく初動体制を取るべく消防車両を移動しようと車庫に目を向けると、十分な間隔が保たれているはずの車両が、今にも接触するかのように揺れていた。誰かが「危険だから車両に近づくな」と叫び、自分はただ揺れが収まるのを待った。訓練塔では、鉄骨同士がぶつかる鈍い音が発せられ、まるで危険を知らせる「警報音」の様だった。

一向に収まる気配を見せない地震も数分経過すると、徐々に揺れが小さくなった。数名の職員が車庫に走り、車両を出そうとした際にポンプ車同士が接触した。私も細心の注意をはらい救助工作車と化学車を車庫前へ移動したが、化学車は積載水の影響か停車してもなお揺れていた。車両から降りると揺れは収まっていた。

事務室に入るとロッカーに収納されていた防火対象物の台帳が床一面に散らばっていて、地震の大きさ、そして激しさを再認識した。

直ぐに、救助事案の指令を口頭で受け出動したが、意外なことに出動途上の道路に亀裂などは確認されず、信号は正常に点灯していた。規則正しく走行する他の車両を見て、「あの揺れは夢だったのか」と不思議な感覚になった。しかし、道路沿いの自動車販売店ショーウィンドーが割れ、ガラスが道路上にまで散乱しているのを目にして直ぐに現実に連れ戻された。同乗していた隊長と交わした「今日は長い一日になりそうだな」という言葉が忘れられない。

救助現場に到着すると、老人男性が倒壊した石蔵の下敷きになっていた。老人の言葉が聞き取れ、「生きている」と理解できた。見ると、そこに停めていたであろうオートバイが石蔵の門扉を支柱の様な形で支え、老人はそこに出来た僅かな空間に閉じ込められていた。救出方法は、付近で作業をしていた作業員と小型パワーショベルの協力で石柱と門扉を支え、自身が空間内に進入し、抱きかかえで老人を救出した。その後、救急車が到着し傷病者を引き継いだ。これが「長い一日」の最初の救出者である。使用資機材を収納していると、警察官が到着し、「10mの大津波警報が発表されました」と伝えてきた。そこで初めて本震災で最大の被害を及ぼした「津波」の存在を知ったが、まだ現実味は抱けなかった。

帰署途上、津波の警戒として沿岸部を経由するルートを隊長に提案したが、第二の出動に備えるべく、帰署に向った。

振り返ると、この決断で自分が生きているのかと考える事がある。また、現場の石蔵にも津波が押し寄せたのが後日確認できた。

無線で他所属が津波警戒として活動中であることは伺えたが、混信はしていなかった様に記憶し

ている。「津波到達」との無線を傍受し、海岸部を見ると、地を這う黒い水と防潮林を遥かに越える白い波しぶきが遠くからでも確認でき、それが「大津波」であると初めて認識すると同時に、海側を避け緊急走行で山側へと進路を変更した。途中、地震の影響で踏切が通行制限されていたため、更に進路を変えた。

車両拡声器で「津波到達」を周知しながら走行し、車両内から東方の海側を目視すると、家屋どころか木々も消え去り、海と陸の境界線が無くなっていた。

「老人保健施設で津波被害、傷病者多数」との無線を傍受し、本部からも出動指令を受けたが、現場到着を試みるも、津波による瓦礫と倒木によって通行できず、最終的には現場のかなり手前の部署となった。海岸から約2Km離れた老人保健施設では、既に先着隊が活動中であったため、救助隊は「車両内に3名の要救助者発生」との指令を受け、付近の捜索を実施する。津波によって大量の海水が溢れ、膝上まで達したそれは黒く濁り、道路の境界が全く分からない状況だった。流れていた木材を手に取り、地面を突きながら進み、呼びかけながら捜索を行った。しかし、該当すると思われる車両は見当らなかった。

打上げられた海水に反射する茜色を見て、時刻が夕方であることに気付いた。

すると、そこで同じ隊の隊員が思わぬ発言をする。「家が無くなっている」。彼は、遥か海側を見て海岸から数十メートルという距離に妻、子供、両親、祖母と暮らしていた自宅があり、その家が無くなっている事に、この時気付いたのである。家族の安否は確認できず、また彼は、地震発生当初、ポンプ車の接触事故を起こしていたので、私は注意力散漫による本人の二次災害を懸念した。幸い、家族は全員無事で本人の事故も無かった。

車両内の要救助者の捜索は発見に至らず、老人保健施設での救助活動に移った。途中、施設入居者と思われる数名が泥に塗れた状態で発見できたが、既に死亡していた。私自身が初めて経験したトリアージだった。

「トリアージ：黒」を通り過ぎ、老人保健施設へ到着すると、別の隊長が道路西側に流された傷病者のトリアージを行っていた。カラーは「黒」、道路を境に西側は幾分高台であったにもかかわらず、そこまで津波が達していた事に驚いた。ここ

写真1　老人保健施設の被災状況（3月11日撮影）

まで「トリアージ：黒」と判断した傷病者は、私の手元の記録では8名だった。

老人保健施設内は津波で流された瓦礫と木々で埋もれ、内部が見渡せない状況であった。付近に駐車していたであろう車両が、窓から施設内に突き刺さっていた。

火災は発生していなかったが、スプリンクラーヘッドから水が噴き出し、自動火災報知設備の警報音が鳴り響いていた。駐車場で横転した普通乗用車の中に老人女性が1名おり、中に進入し救出、担架で搬送した。その後、付近の捜索を実施し、周囲が暗くなり始めた頃、「津波接近」との情報が無線で知らされ、急ぎ消防署へ引揚げた。

帰署後、再度、倒壊家屋で脱出困難者数名との救助指令を受け出動する。周囲はすっかり夜の闇が覆い、照明が無ければ活動は難しい状況になっていた。水位は膝まで達していて、自力歩行可能の傷病者は足元へ十分配慮し、前後に活動隊が付く事で救出できたが、担架で救出する場合は、両手が塞がれた状態にもなり、歩くのに不安だった。ここで2名を救出し、救助隊は付近の捜索を実施後、現場を引揚げた。

帰署後、自分の濡れた活動服や編上げ靴を交換して、夕食をとったところで「津波で流された車両に3名取り残されている」との救助指令を受け、救助隊5名で出動する。南に位置する小高分署へ到着し情報を得た後、現場へ向かうも津波による倒木で車両が進入できない状況であったが、その都度、用手でそれを避けながら車両の進入路を確保した。

現場に到着したところで、道路脇の2階建て住宅から助けを呼ぶ声がしたため、初めに、そこから3名を救出し、小高隊へ引き継いだ。車両内に取り残された者は、救助工作車が部署した位置か

ら更に離れた地点である事が分かったが、道路を完全に塞ぐ状態でコンテナがあり、徒歩で目的地へ向うことになった。情報では、水が溜まった水田で車の上から助けを求める傷病者が1名、津波で流された車両内に3名、津波で倒壊した飲食店の内部に2名であった。

水田内の車両上から助けを求める声は、私も聞き取れ、隊長が直ぐに助けに行く旨を伝えた。水深が予想以上に深く、夜間ということもあり冷たさが身にしみたことを記憶している。ボートを手配し、その間は別の要救助者の救出に向った。飲食店に取り残された要救助者2名は、老人女性1名と成人男性1名であった。消防団員も現場に駆けつけていたため、相互に協力しながら飲食店の2名を救出した。

次に車両内部に取り残された3名の救出では、ガラス破壊器具で後部ドアを開放し、救出した。3名の内訳は、成人女性1名（母親）と小学生女児2名（姉妹）であり、海に近い地区で津波に巻き込まれ、そこからはかなり離れた場所に、奇跡的に漂着したとのことであった。津波は3回到達したと女児は証言した。救急隊が到着するまで救助工作車内で、救出した5名を収容し、その後、救助隊は水田内の要救助者の位置を特定し、到着したボートに4名が乗船した。ボートには確保ロープを結び、呼子で信号の確認を全員で実施した後、私は左舷オールを担当した。水深は約1mあった。要救助者は車両が水没してしまったため、車両屋根で助けを求めている状態であった。気温が低く、衣類も濡れていたため、低体温状態に陥り意識が朦朧としている状況で助けを求めていた。ボートに収容後は、予め確認していた呼子の信号で「引け」を合図し、陸側からの牽引でボートを引き寄せ救出した。震災発生後から続く救助活動で13番目の救出者であった。

南相馬消防署に帰署後、時計を見ると日付は替わり時計の針は午前0時30分を示していて、大変驚いた。夜間は、火力発電所内部で発生した火災に第一隊が出動し、私は12日の早朝4時からの第二隊として出動した。

私は、今回の震災後約1カ月の自身の活動を簡単に記録していたので、当日の対応を振り返る際に役立ちました。3月11日以後も、火力発電所で発生した2件の火災出動や、管内の他所属でのボートを使用した捜索活動、更には、緊急消防援助隊の受援活動に従事しましたが、訓練では体験出来ない事や様々な障害がありました。

しかしながら、震災当日を振り返り、それぞれ異なる場所で13名もの生存者を救助出来たのは、今後の私の消防人生の中で大きな、そして貴重な経験です。

我々、相馬地方広域消防は地震、津波、火災、そして今なお続く原子力災害に直面し、まさに世界最大の災害を体験している消防機関と言っても過言ではないでしょう。この災害を必ずや乗り越え、再び「安全で安心な地域づくり」のため尽力して行く気持ちです。

また、この記録は来たるべき復興後の相馬地方広域消防にとっても貴重な資料となり、次の防災を担う世代に語り継がれていくことでしょう。

写真2　相馬地方広域消防本部南相馬消防署全景
（3月12日撮影）